

23 杉山三部書の研究（その1）

——成立について

○長岡靖彦・中島 史・北村 智・長尾栄一

一 杉山和一と三部書

杉山和一は、一六一〇年に生れたが、幼い頃に失明する。後に鍼を志し江戸に上り、山瀬啄一（京都の入江良明の弟子—良明は入江流開祖入江頼明の子）に師事したが愚鈍にして破門され、江ノ島にて断食祈願を行い、鍼術の妙を得た（この時鍼管を授かった）という。その後、京に行き良明の子豊明に師事する（良明は他界していた）。江戸に戻り開業するや門前市をなす。一六七一年に検校となる。一六八二年に私塾を改め鍼治学問所とした。一六八五年綱吉公の病を治し白銀五十枚を受け、その後月俸を賜われるようになる。一六九二年関東総検校となる。一六九四年歿。著書にいわゆる杉山三部書—『療治之大概集』『選鍼三要集』『医学節

要集』がある。

二 三部書の出版と写本

最初の出版（活字）は、明治十三年、前検校の明石野亮らの手によるものであり（原本の存在確認済）、刊行までは写本で伝わっている。その後、明治二〇年に再版が出る（影印出版本有り）。この再版本は、その後、売捌人の追加・変更と、数ヶ所の活字組替により再度出版される（原本入手）。つまり、明治活字本は最低三回出版されている。

さて、これらの活字版が原形を残しているかどうかを調べる為に、京大富士川文庫から写本（マイクロ）を収集し、明治二〇年再版の影印本を基として（他は全本揃わず）比較した。結果、項目・内容はほぼ同じで、卷分けは元より『大概集』『節要集』が漢字仮名混り文、『三要集』が漢文体（一写本は別）で序・跋有り、という構成は変わらなかった（活字本も含めて校勘作業を進めている）。

三 三部書内の特徴と引用文献

三部書の特徴、及び明記している引用文献及び文を抽出した結果は以下の通りである。

①『大概集』は、治療の入門書の意味合いが強く、全て記

憶すればそのまま治療が可能である。また、数カ所に短歌調の語呂合せを用いており、記憶の便を計っていると思われる。引用書は『内経』『外台秘要』（各一回）のみである。但し、『外台秘要』からの引用は『古今医統大全』からの孫引きである。

②『三要集』は、まず四つの論考を述べ、次いで『類経図翼』からの引用によって要穴（簡略化）等を述べている。『節要集』は論考のみである。この二書の論考では、『内経』や『難経』からの引用が多く、これらの鍼灸の原典文献を除けば、殆どが明代後期のものである。李朱医学に属するものは『格致余論』『医経溯洄集』で、前者は三焦の理論展開、後者は脈状の説明に用いている。

ここでの問題は、『大概集』が何の影響を受けたのかである。そこで入江流成立の頃の文献（入江頼明は豊臣太閤医官園田道保と、朝鮮の役の際に明人呉林達から医術を伝授されたという）を中心に調べている内に、同一文が扁鵲新流（安土桃山から江戸時代にかけて成立した模様）の書中に数ヶ所見いだされたのである。この流派の詳細は分かっていないが、杉山流との間に介在しているのは入江流であろう。な

らば、『大概集』は入江流をそのまま襲った可能性が強い。

四 三部書の成立について

三部書は一般に一六八〇年頃の成立とされているが、果たしてそうであろうか。

『大概集』はその容易な内容、和一が学んだ入江流を襲った可能性からいって私塾時代からのものである。『三要集』は①漢文体、②序・跋有りという点は他の二書と全く異なり、何らかの意図が感じられる。また、跋文中の「此書教不学者、且為使盲人語也。」という記載は、教育書として意識される為の記述ではないだろうか。以上から考えるに『三要集』は一六八二年に私塾から鍼治学問所に移行する前後、幕府の目を意識して作られたのではあるまいか。では、『節要集』はどうであろうか。これらの三書は、後に三部書と呼び称される点から言っても、同じ系統に属するはずである。ところが△杉山真人伝▽の中に「著す所の大槪集、三要集あり、其の手に成ると雖も復上りて校正を賜う」という記載がある。もし、この二書以前に『節要集』が成立していたとすれば、同様に記載されていてもおかしくはない。よって前述の二書以後の成立と考えられ

以上の点より成立は①療治之大概集②選鍼三要集③医学節要集の順で、时期的にも幅があるものと考察する。

(筑波大学理療科教員養成施設)

24 「杉山三部書」の研究 (その2)

— 経穴と補瀉 —

○中島 史・北村 智・長岡靖彦・長尾栄一

はじめに

△杉山三部書▽は、江戸時代に杉山和一が鍼灸教育を目的として書かれたといわれている。そこで、我々は鍼灸の教科書としての、そして現代鍼術に大きな影響を及ぼした△三部書▽の経穴および補瀉について検討した。

(1) 経穴について

全体として『療治之大概集』の経穴部位は、その多くが中国文献の一部分を活用した記載である。例えば『十四経發揮』と比較すると、青靈「在肘上三寸拳臂之取」が「肘上三寸」、地機「在膝下五寸」が「膝ノ下五寸」などである。また『療治之大概集』独特の表現も多く、大椎「肩ト等シキ節ノ下」、雲門「乳ノ上五寸脇エニ寸」、欠盆「喉ノ